

本宿中学校の特色は国際理解教育

校長 柿沼 隆一

本宿中学校は昭和55年（1980年）4月に開校をしました。開校当時は全校生徒が713名（17学級）の規模の学校であったそうですから、現在（全校生徒355名、12学級）よりもずいぶん生徒数が多かったようです。私は13代目の校長として平成31年4月に本宿中学に着任しましたが、その年の6月から令和に年号が変わりました。令和の最初の校長ということになりますね。

学校の特色としては、国際理解教育に力を入れていることです。

横浜市内の小中学校ではアフリカの一国を交流国と決めて交流を行うことにより、アフリカ各国への理解を深めることを目的として「アフリカとの一校一国」を実施しており、本宿中学校では2018年度、2019年度にガーナを交流国として交流しました。具体的にはガーナの中学生とアートマイル国際協働学習プロジェクトの取り組みとして、壁画を協働で制作しました。



2019年度 協働制作した壁画

2020年度は感染症の流行で交流ができませんでした。

2021年度はアフリカの交流国が見つからず、インドネシアの中学校（SMP Labschool Cibubur）を交流相手とし、アートマイル国際協働学習プロジェクトの取り組みとして、壁画を協働で制作しました。壁画を制作するにあたり両校の生徒がインターネットを介した会議を行い、SDGs（持続可能な開発目標）について様々な意見交換を行い、それをもとに図柄を考えました。そして、壁画の右半分を本校の生徒が描き、左半分をインドネシアの生徒が描いて完成させました。せっかく作った壁画を日本に住んでいるインドネシアの人にも見てもらおうと、2022年9月1日、壁画制作に関わった代表生徒4人がインドネシア学校東京（Sekolah Republik Indonesia Tokyo）を訪ねました。当日はインドネシアの中学生5人と話をすることができ、壁画に描かれた青い図柄がインドネシアの布地で使われている模様であることを教えてもらいました。やはり、インターネットを介してではなく、直接会うことが本当の交流になることを再確認しました。



2020年度 協働制作した壁画



2022年9月1日インドネシア学校東京訪問

ガーナやインドネシアとの交流は有志の生徒で行ってききましたが、全校生徒が国際理解を進める取り組みとして2021年11月30日（火）に学年ごとに分かれて体育館で「地球のステージ」を鑑賞しました。「地球のステージ」は海老名市で心療内科医をされている桑山紀彦氏が、これまで訪れたことのあるフィリピン、南スーダン、アフガニスタン、ミャンマーで出会った子どもたちにスポットを当て、ライブ音楽と迫力のある映像でそれぞれの国の子どもたちが貧困や戦乱の中でもたくましく生きる様子を私たちに紹介してくださいました。現在は新型コロナウイルスによる感染症の流行で海外へ行くことが困難な状況ですが、いずれは子どもたちがいろいろな国へ出かけて行って、それらの国の人々と手を携えて共に生きていくためのグローバルな感覚を身に付けてほしいと思いました。



地球のステージ